

太平生命・日産生命の慈愛保険－戦前の生命保険商品のネーミング (4)－

大学キャンパスには新生で溢れかえっている。久しぶりにうれしい風景だ。しかしコロナ禍での遠隔講義に慣れてしまった高学年の学生には、大学に登校するのは不評のようだ。遠隔で問題なく学習していたのに、なんで汗水たらして登校しなければならないのか、というわけだ。これとは対照的に、新生は嬉々として対面授業に通っている。また「黙食」の下ではあるが、学食でご飯を食べる学生の楽しそうな顔をみると、大学キャンパスが戻ってくれて本当によかったと思う。昨年新生は、最初に少し対面講義を経験したが、すぐに緊急事態宣言が発令され、前期の講義のほとんどは遠隔講義形式だった。昨年、彼らに「友達ができたか？」というアンケートをしたところ半分以上の人が「できていない」という回答だった。今年も新生に同じ質問をしたところ、「いいえ」と答えたのは105人中4名だけだった。まさに「対面」の威力である。高校の同級生で某大手有名私大に勤めている友人が、昨年まで校長を兼任していた付属高校からの進学生がキャンパスで明るく挨拶してくれたと喜んでいて、これなど対面だからこその話である。

もちろん遠隔講義のメリットがあることも事実だ。200名をこえるような大講義の場合、ウェビナーなどを活用した方が効率的な面がある。また、海外出張中でも遠隔でゼミナールを開講できたり、学会出張中にも遠隔授業を許したりするならば、学生の教育機会が広げられ、また不必要な「補講」を少なくすることができるだろう。ただし遠隔方式の教育への殉難な活用は、既存の単位認定方式や就業規則などによって規制されている。柔軟性が求められるところだろう。

振り返れば、コロナ禍での大学の授業形態は、政治に影響された面があったことを否定できない。何が何でもオリンピックを開催するという政治判断が、大学キャンパスでのクラスター防止意識を異常に高めたかもしれない。だが、大学生が登校しないことが、コロナ蔓延防止にどれだけ効果的だったのかは定かではない。大学側が、少し防衛的になっていたこともある。なお、学生の海外渡航を原則禁止する大学が多いようだが、コロナ感染だけを考えたら、学生の自由を強く束縛する論拠としては弱いように思われる。ワクチン接種やPCR検査などの条件付きで、渡航先を慎重に選択するということで学生の海外体験する自由を認めるのが合理的のように思われる。海外の大学の対応とかけ離れた「鎖国」状況が無反省に継続するとしたら問題だ。

さて、前回紹介した「慶福養老保険」を販売した片倉生命は、昭和17年10月に日産生命に吸収されている。日産生命は昭和15年に太平生命から社名変更をした生保会社である。太平生命の来歴に関しては、すでに86回と87回の連載で詳しく言及したが、若干の補足的説明が必要だろう。太平生命が社名変更した理由は、太平生命の経営権を日産グループが買い取ったためである。その際に太平生命の経営権を譲渡したのは、富国徴兵の経営陣であった。昭和初期の太平生命は、如水会初代会長であった江口定條らによる経営だったが、昭和6年に江口は役員（取締役会長）を退任し、同社の経営権は富国徴兵に移った。これにと

もなつて株主構成にも変更がみられた（「営業報告書」付属の株主表参照）。営業報告書を一覽して興味深いことは、経営権が移るとともに、富国徴兵の本社が太平生命の本社社屋（画像参照）に移転し、日産への経営権譲渡の直前の昭和14年に富国徴兵の不動産明細表に本社社屋として明記されることになったことである。関連文書は残されていないようだが、富国徴兵が日産に経営権を譲渡する際のひとつの条件であった可能性がある。ともあれ、現富国生命本社の地所は、このように定まったのである（画像参照）。

日産生命の前身会社である太平生命の販売していた「慈愛保険」については、過去の連載ですでに紹介している。今回はこの商品の後日談も含めてあらためて紹介したい。日産生命が合併した片倉生命の「慶福養老」の名称は利用されなかった。これに対して、太平生命の「慈愛保険」の名称は日産生命になつても継承されている。「慶福養老」と比べて「慈愛保険」は、独自の商品設計が行われていた。すでに過去の連載で紹介したように、保険期間の前半が生存保険で、生存保険満期後に定期保険（死亡保障）となるように設計された生命保険商品であった。なお定期保険の満期時に保険金額の10分の1に相当する満期祝金が支払われることになっていた（画像参照）。

片倉生命の「慶福保険」については、「幸保険」という名称に変更されたようだ（画像参照）。日産生命による「慈愛保険」と「幸保険」の「保険案内」を見ると、戦時経済の影響が著しく強くなつている。幸保険の「保険案内」の表紙からは「国に国防、身に保険」という標語が目飛び込んでくる。現代人の目には、どこが「幸」なのか理解できない（画像参照）。慈愛保険の「保険案内」の表紙は、東南アジアの地図を背景に幼児の笑顔を配し「産めよ増やせ」政策と「南方進出」を象徴したものとなつている。この画像の示す意図は、慈愛保険の説明に十分に示されている。長文になるが引用しておこう。

「子供は國の寶であります。新しき大東亜建設の大業に邁進する我が日本にとって、次の時代を擔ふ第二の國民たる子供は「家の寶」でもありますが、また今や興亜の力として大切な「國の寶」でもあります。／親御様はどなたでも、貴方様のお子様は、将来、立派な軍人となられるやうに又は有為な人物となられて、大いに御國のお役に立つ人となられるやうに、女のお子様なら立派な日本婦人となられるやうに、即ち國の寶を磨くことに限りなく深い慈愛のお心を注がれますが、貴方様の深い慈愛のお心を託し、其の貴いお志を遂げますのに、最も適はしいのは我社の慈愛保険であります」（日産生命「慈愛保険保険案内」）。

平時において、家族の慈愛に訴えていたはずのネーミングが、「新しき大東亜建設の大業」という名のもとに、子供が「國の寶」に祭り上げられ、「慈愛」の内容が大きく転換しているのがわかる。庶民の暮らしの中に、保険商品をとおして静かに国家主義が浸透していたのがわかる。



大平生命本社社屋（日比谷）



富国徴兵本社社屋と根岸社長他役員（繪葉書）



太平洋生命「保険案内」に掲載されている慈愛保険保険証券の一例（昭和13年頃）

利益配當 幸養老保険の特色

低料保険——出来るだけ少額の掛金で、出来るだけ多額の保険を」といふのが、生命保険に御加入の常則であります。

我社の幸養老保険は此の目的に適つた最も理想的な生命保険であります。

利益配當——而も御加入後満四年目から毎年、保険料と差引の方法で利益配當を差上げます。此の利益配當は既拂保険料に比例しますから、配當金は年々増して行き従つてそれだけ毎年の保険料は少くなつて行きます。

御加入者本位の取扱——保険料の拂込方法には全期拂込の他に短期拂込、一時拂及び前納扱を設け、更に保険料振替貸付、證券擔保貸付、拂濟證券の發行、その他、御加入者への奉仕に萬全を期して居ります。

幸養老保険の説明（日産生命「幸保険保険案内」より）



日産生命「幸保険」の「保険案内」の表紙



日産生命「慈愛保険」の「保険案内」の表紙